

活動報告書

報告者氏名：佐藤庸子 所属：大分市立鶴崎小学校 記録日：2014年2月28日

【対象児の情報】

- 学年 小学校 6年生
- 障害名 学習障がいの疑い（おもに書字障がい疑われる）
- 障害と困難な内容

通常学級在籍。小学校入学時から字を覚えられない状況が続き、2年生の終わりになり何とか自力でひらがなを覚える。しかし、助詞の使い方、特殊音節については、未習得。日常の中で話したり聞いたりすることはできるが、発音が不明瞭で、タ行とラ行に置換が見られることがある。聞いたことを覚えることが難しい。漢字を読めないために教科書を読むことには困難を示すが、ルビをふると読むことができる。しかし音読の流暢さは欠ける。文字を想起することが遅く（ひらがなでは特殊音節・カタカナ全般・漢字）書くことを極端に嫌がる。書写はできるが遅い。

【活動目標】

- 当初のねらい
 - ・書字に対する意欲の向上をはかる
 - ・正確な文字の表記（ひらがな・カタカナ）ができる
 - ・自分の考えが明確になるような文章を構成できる体験をつむ
（本児は読みの問題もあるが、通級教室の指導の中では、書きに絞って指導を行う）
- 実施期間 2013年4月18日～2月19日
- 実施者 佐藤庸子
- 実施者と対象児との関係
 - ・通級の担当教員と児童（他校より週1回1時間の指導）

【活動内容と対象児の変化】

- 対象児の事前の状況
 - ・対象児とのかかわりは4年の3学期からである。当時から書字への抵抗感が強かった。
 - ・文字の学習については、多様な教材を用意したが、本児には、受け付けられない状態が続いた。
 - ・特殊音節の表記も不正確であり練習しても定着しなかった。
 - ・口頭では話せるものの自分の気持ちを文では表せなかった。

○活動の具体的内容

1) 書くことへの抵抗感の軽減を目指した取り組み

～メール機能の利用（期間は4月から11月）～

本人が思うことを文字で自由に表現できる方法として、iPadのメール機能を使うようにした。通級教室での指導は週1回であり、正確な表記が定着するまで時間を割くことは、難しいからである。メールには、文字の予測機能がついているので、本人があまり労力を使うことなく文字入力ができるのではないかと考えたからである。また、文字入力は、ひらがな表を用いて文字を入力するようにした。

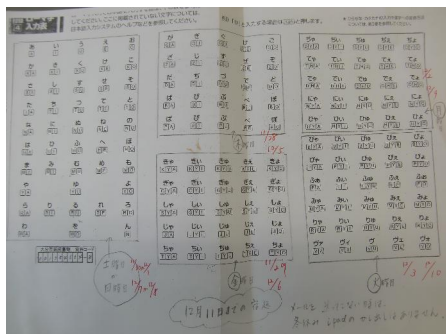
メールの内容は、始め「給食の献立」をしらせるようにした。「給食の献立」にした理由は、本人が何をメールにすればよいか明確なこと、献立の中には、特殊音節が多く含まれるので、毎日入力することで文字への表記の想起の練習になるので

はないかと考えたからである。その後、宿題についての報告、自分の気に入っている物の写真を添付してのコメントなどを書くことなどテーマを広げていく。

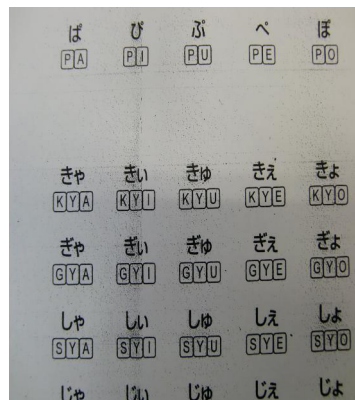
2) 自由に入力できる手段を得るための取り組み

～メールを使ってのローマ字練習（11月～2月中旬）～

ローマ字入力表を見ながら文字を打ちそれをメールで送るようにした。その後、特殊音節の単語を練習するようになった。



→
拡大した
もの



使用したローマ字入力表

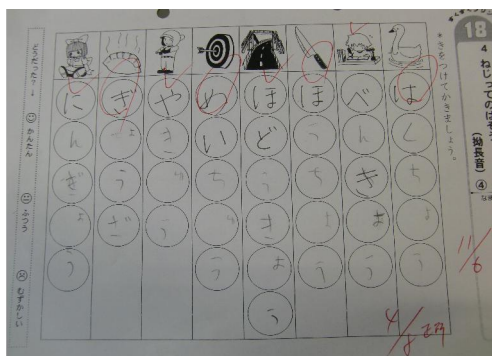
3) 卒業文集に向けての取り組み（9月～1月）

2学期からは、卒業文集に向けての取り組みを行った。小学校生活を振り返っての作文を書き、その中から卒業文集の内容を考えるようにした。まず、作文の下書きとしてアプリの「SimpleMind」を活用した。「夏休み」や「運動会」をテーマに決めその言葉から考えられることを上げていくようにした。運動会をテーマにした作文を書くことを本人が希望したので、作文の構成を行いその後は、自力で作文を書きあげた。その作文を元に卒業文集の原稿作りの下書き作りでは、パソコンを使用した。清書は、「D e k a M o j i」を活用して正確な漢字を書くようにした。

○対象児の事後変化

1) について

メールのやり取りを開始するようになり、ひらがな表での文字を探すことが初めに比べ速くなったこと、文字を書くことに対してさほど嫌がらずに取り組むようになってきた。(4月から11月までに、64回メールを作成し、筆者まで送っている。)また、自分のクラスの漢字のテストに向けて練習を自発的に行うようになってきた。通級指導教室では、自分が送ってきたメールでの表記で間違いがあったことについて表記の仕方を再度学習する際、嫌がらずにやり直すことも増えてきた。



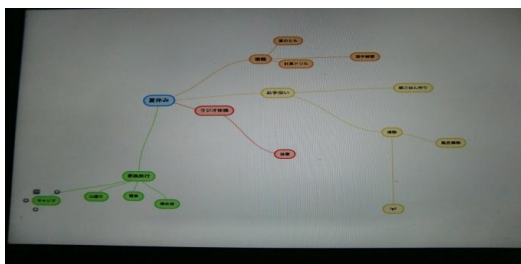
特殊音節の学習
のプリント

2) について

ローマ字については、記憶できていなかった。しかし、ローマ字の方がキーボードを打ちこむときに負担を感じないとの本人の意見を尊重して、11月からローマ字入力の練習を行い始めた。11月末から練習を始め1月の終わりまでに42回練習した。あいうえお順に練習するので、パターンを覚えると清音・濁音については練習した文字については、ローマ字入力表を見なくても素早く入力できるようになった。しかし、一週間すると入力できていた文字を忘れることもあった。そのため、特殊音節の単語入力練習を1月終わりから行った（メールは全部で14回）。すると実際に書く際でも、正確な表記の想起ができるようになり、特殊音節での間違いの頻度が下がってきた。

3) について

運動会は、本人もイメージしやすく書きやすい題材であった。運動会の種目の経過に合わせ、出来事を書くことができた（自力で原稿用紙5枚）。自分の書いた作文を元に卒業文集を作成することを決めると意欲を持って取り組めた。原稿用紙5枚の中から自分で伝えたいことを選ばせ、それを600字程度の文章に直す作業を、パソコンのワープロ機能を利用して作成させた。その際、ローマ字入力表を見ながら入力した。また、できた原稿を見ながら既定の卒業文集用紙に視写することができた。



「SimpleMind」での言葉集め



「DekaMojji」の学習

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

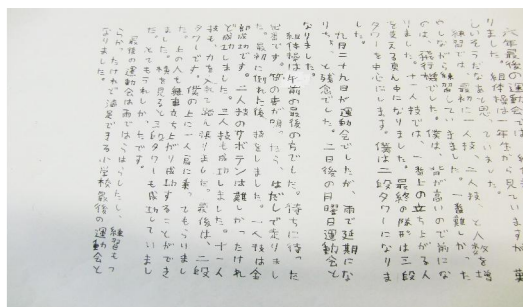
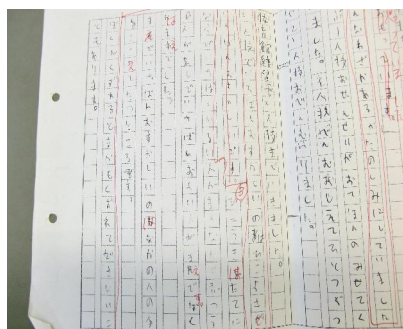
1) 6年という学年もあり、ひらがな習得の練習（iPadのアプリも含め）では、本人のプライドを傷つけること（こんな簡単なことを行っているといった気持ち、以前に何度も塾等で行ってきて習得できなかったという失敗経験）もあり、今後活用範囲も広がることを考えてメールで身近なことを知らせるようにした。本人も、メールについてはあまり負担を感じずに取り組むことができた。

課題を「給食」→「宿題」→「身近なものの写真とコメント」と変化させながら行った。本児が送ってきたメールの内容の中で、単語の表記に間違いがあった時は、通級指導教室で訂正するようにした。

9月での指導では作文の題材づくりに「SimpleMind」を使用した。その後、本児は自分の学級で作文を作成した。作成した作文では助詞・特殊音節の表記に間違いが見られた。

10月からの卒業文集に向けての原稿作りでは、パソコンのワード機能を使用した。これは、筆者のiPadを十分に生かし切れない力不足も大きいですが、学校場面では、パソコンでの入力を行うことが多いからである。その時から、メールではローマ字入力を始めるようになった。本児は、ひらがな入力（50音）よりローマ字入力（26音）の方がキーを見つけやすいようであった。下書きを見ながら清書する

ときは、アプリを利用しながら細かな文字を拡大することで本人も自信を持って書写できた。



<自分で書いた作文>

<卒業文集用 清書>

2) 表記について

通級指導教室では、授業の終わりに感想を書くようにしている。

<6年4月最初の通級教室での感想>

「国語わたのしくなった。パズルむすかしかた」

(国語は楽しくなった。パズルは難しかった。)

<6年2月最後の感想>

「れんしゅうして ローマ字ができるようになりました。

かん字がかくのはむずかしい。読みはまだまし。

ちゅうがくでは、えいごがよめるようになりたい」

4月に比べ、自分の気持ちを表現することができるようになった。また、助詞や拗音についても正確に書けるようになった。

○エビデンス

メールで文字入力を行う前（通級指導教室指導開始時と5年の3月）と6年6月（メール開始35回目）と1月（ローマ字練習20回目）、そして最後の2月の指導日（特殊音節練習14回目）のひらがな単語聴写テストの結果は次のとおりである。（「読み書きが苦手な子どもへの<つまずき>支援ワーク 竹田契一監修 村井敏宏著 明治図書」の「ひらがな単語聴写テスト」を使用した）

	濁音	半濁音	拗音	拗長音	促音	拗促音
指導開始時 4年生12月	誤数割合 41%	誤数割合 60%	誤数割合 100%	誤数割合 80%	誤数割合 100%	誤数割合 100%
5年生3月	誤数割合 16%	誤数割合 40%	誤数割合 100%	誤数割合 40%	誤数割合 20%	誤数割合 100%
6年生6月 メール 35回 後	誤数割合 0%	誤数割合 20%	誤数割合 80%	誤数割合 20%	誤数割合 20%	誤数割合 100%
6年生1月 ローマ字練習 20回後	誤数割合 0%	誤数割合 0%	誤数割合 40%	誤数割合 20%	誤数割合 20%	誤数割合 60%
6年生2月 指導最終日 特殊音節練習 14回後	誤数割合 0%	誤数割合 0%	誤数割合 0%	誤数割合 0%	誤数割合 20%	誤数割合 0%

なお、単語聴写には、清音、撥音の検査も含まれているが、それについては、5年の3月末にはほぼ習得できていたので、結果から除いている。

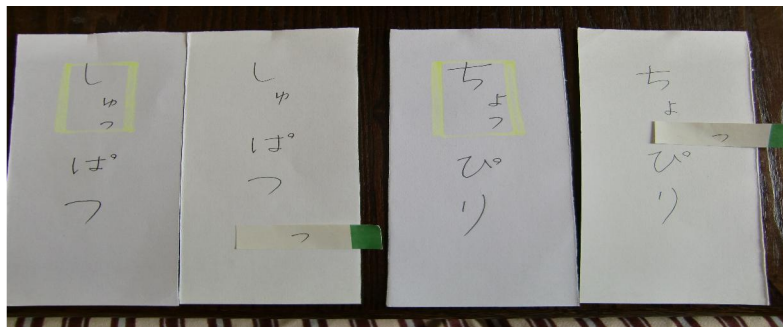
5年の3月では、「濁音」の誤数割合が、16%に対して6年6月では、0%に変化している。また、「半濁音」についても40%から20%に減ってきている。これは、メールでほぼ毎日文章を作る際、「清音」「濁音」「半濁音」を探すことで、違いを意識付けできるようになったと考えられる。

「拗音」「拗長音」については、間違える割合が5年3月から6年6月に比べて下がってきている。これは、給食献立を知らせるメールでよく出てきた単語に含まれる「きょう」「じょう」などを文字で書くときに想起しやすかったと考えられる。

しかし、拗促音については、メールでのやり取りの中で出てくる回数も少ないことため6月の時点ではうまく書くことができなかった。

文字を入力する際には、その構成がわかっていること たとえば 「出発」を入力するなら

《し》 《ゅ》 《っ》 《ぱ》 《つ》 と5つの文字を探すことがしっかりと身につけていないとできないのである。そのため、特殊音節の仕組みについての学習も引き続いて行った。



(左) 文字の構成の確認 (右) 小さい「っ」の場所の確認をする

後半のローマ字練習を行うことで「拗音」についての文字のしくみが本人なり音獲得できた。拗音の誤数割合 6月80%→1月40%に減少

《じどうしゃ》 ZI DO U SYA
じ どう しゃ

※しゃの音と表記が一致するようになる。

また、拗促音についても、練習14回目の後、単語聴写テストを行うと間違いずに表記することができた。(2月0%)

《ちよっぴり》 TYO XTU PI RI
ちよ っ ぴり

※拗音+促音 が定着した。

○その他

1) 音声入力について

文字入力でも本人には、負担な様子が見られたので、何度か文字を音声で変換するアプリ(DRAGON Dictation)を用いて表現を試みたことがある。しかし、本人の発音が不明瞭であるため、うまく感知せず文字変換できなかったため、音声入力はあきらめた経緯がある。

2) 本人の得意なことの発見と表現の仕方

「写真を添付し、コメントを一文書く」という、課題の延長で夏休みの間は、「コ

メントは3つ文を書く」ようにした。すると、夏休みの宿題の中で朝食を作ったものや工作したものを写真に撮りそれをメールで送ってきた。

〈ある日のメール〉（本人のメール転用）

朝ごはんを作りました。ウインナーと卵を焼きました。美味しかったです。



本人は、料理するのが好きで家でもわりと料理を作るのだという。今後は、自分の料理を撮影しておき、アルバムのようにして記録を残すことも可能である。本人の得意なことが生かせることも iPad 機能ならではと感じている。また、通級指導中、気持ちを表現するのも難しいところがあるが、メールを介して本人が本当に困っていることについては、知ることもできた。表現方法の一つのツールとして今後の活用も期待できる。

3) 本人のモチベーションを維持するために

卒業文集を作ることについては、本人には完成したい気持ちが強かった。その際、パソコンで作成した文を卒業文集の載せるか、本人の自筆で載せるか話し合いをした。すると本人からは、文を写すことは苦手ではないことを伝えてきた。それで、今回のように文章は、パソコンのワープロ機能を使って作成し、印刷する→その印刷物を見ながら卒業文集の原稿用紙に視写するという取り組みを行った。

この時期の本児は、卒業文集の原稿を完成したいという思いが強く、あれほど嫌がっていた文字を書くことも進んで取り組み一文字一文字丁寧に正確に視写できた。これは、本人の強い意志があったからこそだといえる。つまり、やらされる学習ではなく、主体的な学習こそが本人のやる気につながっていたと考えられる。

メールのやり取りの中で、ローマ字入力の方がやりやすいと話したことから取り組み始めた。ローマ字入力を行いながら特殊音節の構成について本人が納得し、体得してきたことが、表記の間違いくさにつながったと考えられる。

学びたい気持ちは、本来持っているのだけれども、そのきっかけをみつけどのように支援していくか改めて考えさせられ事例であった。

【今後の見通し】

文章を正確に入力することができるようになれば、書字に対してかなりの支援ができると考えられる。本児は、自分では文字を想起するのが難しいが、書かれた文章はきちんと視写できる。よって、入力への負担が減れば iPad での活用がひろがりそれが学習への支援になると思われる。今回は、文字の入力への活用を行ったが、本人の知りたい言葉などは、辞書のアプリを活用しながら、学習できるようになると考えられる。また、書きたい漢字も自分で調べるのが可能となる。中学校でも、通級指導教室を続ける予定であるので、本児の状況を伝えて支援の継続できるよう連携を図りたい。